

例えば、写真①と③のように木造建築の通りに面した側一面のみをコングリート仕上げとして、その適宜な場所に洋風の飾りを施す。



⑥孤高のピーコック



④おぎや(矢野町5)



③旧林自転車店(矢野町2)

さて、看板建築とは何ぞや。そもそもそんな建築用語は無かったのだが、昭和の終わり頃にその名を冠した本が出る。著者は、当時、建築探偵で売り出し中の藤森照信氏、建築史家にして後の建築家。この本によれば、実際の用語デビューはもつと前らしいが、書籍化されたという意味でも少くも社会認知され始めていたのだろうと察せられる。

孔雀⑤が羽を広げていた。戦後、高度成

長期にアーケードが設けられ、残念ながら承らくこの孔雀は下から眺めることが出来なかった。それをある時上で発見した際、私は「孤高のピーコック」と名付けたものだ。変わった素材としてはタイルと銅板。両方とも残念かな現存しないが、⑩の金本鉄店はスクラッチタイル貼りの建築としては県内屈指だった。大正12年に完成したかの帝国ホテル(フランクロイドライトの設計)に使用された外装材で、関東大震災で



⑧向灘郵便局(高城5)



⑦大西屋倉庫(北浜1)



⑥まえがみ呉服店(新町4)

無事だった事から急に全国的に流行してゆき、地方では昭和初期の建物指標のようになる。銅板の方は、⑪の金本本店の方、生業も和洋金物商。こちらは和風建築としての意匠となるが、一文字瓦に見事な板金装飾の建物として、扱い商品の喧伝も兼ねたこれまた県内屈指の商家だった。



⑪金本本店(新町3)



⑩金本鉄店(大黒町1)



⑨高村印房(矢野町4)

もう一つは、商業の町であるという市の性格、つまりは商店が多いという根本的な理由。一般的には、「みかんと魚の町」というステレオタイプの形容はあるが、実はそれは戦後の話、しかも旧矢野崎村(向灘)エリアの日の丸みかん産地(権現山)とトロール漁業基地あつ

市内の狭い通りをアチコチ探索すると、至る所でその看板建築に出くわす事になるが、よく目にするのが洗いうしという左官技法によるレリーフ装飾。例



②宇都宮理容(仲之町)



①マツモト理容(南大黒町)

【何故多く残っているか?】
大きく分けて二つの理由が考えられる。まず、戦災を免れている町である事。戦前期に市制を敷いた町は松山市(M22)、今治市(T9)、宇和島市(T10)、そして昭和10年に八幡浜市が県内4番目に市制を敷き、次いで新居浜市(S12)の計5都市。これらの中で、何故か八幡浜市のみは空襲被害に遭っていない。なので、戦前期の建築スタイル(戦後もあり得たが)である看板建築が、多く残る結果となった。

【その建築的特徴について】
そうした商港としての発展が、狭い埋め立て地に商家が並ぶ町並み景観を形成し、ゆえに「伊予の大阪」とも称されることになる。

※④～⑥は「氷見古民家研究会」よりご教示いただく。